


SGH 成果報告会での代表論文発表

# ともしび
# 共生委員会ニュース

2017 年度　4 号

2017 年 12 月 20 日版

## 66 期　平和共生論文　代表論文タイトル一覧

今年度、クラスの代表論文として選出されたのは以下の１０本です。

○青山学院高等部での授業から考える「差別」の起こる原因とその解決策　HR301　I.H.

○ハンセン病と、その患者への差別から考える「共生」～生きるとは何か　HR302　H.S.

○認知症対策　～“新オレンジプラン”東京都品川区の政策と比較して～　HR303　T.E.

○過労死と軍国主義　なぜ人々は逃れられない　HR304　I.S.

○日本の子どもの貧困　～現状とその解決に向けて～　HR305　K.M.

○「ハンセン病」の過去を見つめて今を問う　ーなぜ差別を受けなければならなかったのかー　HR306　Y.S.

○戦時中における軍歌の意義　ー音楽が導くものー　HR307　H.N.

○多民族社会を作るためには　～アメリカの現況から日本の未来を考える～　HR308　K.H.

○跋扈する貧困ビジネスー生活困窮者が蟻地獄の巣から抜け出すために「わたし」たちは何ができるのかー　HR309　O.K.

○進まない多民族共生　ー排他的な社会を生むものとは　HR310　H.A.

# 宮古とのつながり

HR305　E. H.

岩手県宮古市へ訪問するプログラムに参加した 2017 年は、偶然にも故郷である福島県浪江町の地に足を踏み入れた年と重なった。今年の４月５日、約６年ぶりに見た祖父母の家の中の散らかっている様に衝撃を受けたことは今でも鮮明に覚えている。自分の出身は浪江町で、物心つく前に東京へ引っ越していたが、お正月などの長期の休みではたびたび帰郷していた。しかしそれは 2011 年までの習慣となってしまった。

宮古訪問プログラムを深く知ったのは一年前の0君の礼拝である。部活に所属していた身としてプログラムに参加することは難しかったが、同じ学校内に復興へ向けて動いている人が多くいるにもかかわらず、被災地出身である自分が行動していないことに歯がゆい気持ちになり、それが今年のプログラムには絶対に参加するという強い気持ちへと変わった。それは文化祭実行委員会の代表であるだけではない。復興に対する使命感があるからこそである。

被災者の今の声を直接聞くことができたのは大きな経験となった。とりわけ宮古北高校の方々とは「風化」についてのディスカッションだけではなく、一緒にスポーツを楽しみ、また高等部の文化祭当日に来校していただき、わかめの共同販売やカフェテリアで夕食を共にするなど、たくさんの時間を共に過ごさせていただいた。同世代の被災者の方の考えを聞くのは新鮮であり、驚かされる言葉が多かった。なかでも、震災直後に日本各地からボランティア活動を行いに来てくれた方々、遠い場所からでも募金などの形で支えてくれた方々に感謝していて、自分も将来支える側として地元に役立てる仕事に就くのが夢であるという言葉が印象に残った。

それは宮古北高校との交流だけではなく、学ぶ防災で震災当時の状況を説明してくれた方、宮古市魚市場で宮古市の魅力を伝えてくれた方、高台移転による変化を語ってくれた方など、宮古市で復興に向け仕事をしている人の地元愛を感じたと共に、その熱意は本当に自分の心に響いた。我々がこのようなプログラムを行うことができ、浪江の地に足をつけられることに関して、東北を支えている人々の存在を決して忘れてはいけない。そして、常に意識を高く保ち、未来を見続けている宮古市の方々の姿は、格好良く、自分の憧れとなった。

自然を相手にした時、我々が確実な予想をするのは極めて困難である。大切なことは常に意識を持ち続けることであることを、このプログラムは自分に教えてくれた。そして、この課題を今後も周囲に伝えていきたいと考えている。被災地の声を直接聞いた自分には、東日本大震災で受けた被害を無駄にはさせない、そんな責任がある。

最後に、自分の人生が東北の復興への支えにほんの少しでもなれれば良いと思っている。どんな形であれ、社会貢献につながりたい。自分の仕事に熱と誇りを持った宮古の方々のように。





《６７期修学旅行　平和講話　（２０１７年１１月７日夜）　感想》

# 八木道子さんのお話を伺って

HR206　T.K.

私は八木さんのお話を伺って、原子爆弾が投下されたという事実を改めて痛感しました。八木さんがとても生き生きとお話し下さったためか、今までどこか遠くでの出来事だと思っていた事件が、急に身近な出来事のように感じられたことを強く覚えています。本当に貴重なお話を聞かせていただきました。私が特に身近に感じたのは次の二点です。

一点目は八木さん自身が原爆投下当日に体験なさったことのお話です。八木さんは８月９日、ご兄弟と自宅の二階で原子爆弾が投下されたのを見たとおっしゃっていました。原子爆弾の光を見た後、急いで床にうつぶせて、その上を物がすごい勢いで壁に打ちつけられるのを目撃し、その後、家から出ると周りの風景が一変していたことに衝撃を覚えたそうです。また特に私の印象に残ったのは、防空壕での出来事です。八木さんは、ご兄弟と近くの防空壕に避難し、そこで朝元気に働きに行った「かっこいいお兄ちゃん」達が、大火傷をして避難してくる様子を見てショックを受けたこと、お母様の帰りが遅くて心配だったことを話して下さいました。また、傷を負った大人たちの体から蛆が湧いてしまい、防空壕内がひどい匂いであったことや、お母様が戻られた時の安心感、そんなお母様が次の日にはご自分が働いていたところに戻り、救助活動を行っていたというお話をして下さり、心に残りました。

二点目は、八木さんが体験された、戦時中の生活です。食べるものが本当に少ない中、なぜかカボチャだけがあり、家族で一つ一つ数えながら配ったことなどを話して下さいました。また、常に防空頭巾を枕元において、いつ敵の爆撃機が来ても避難できるようにしていたことを教えて下さり、いかに戦時中の生活が大変であったかを、改めて思い知らされました。

また、谷口さんについてのお話も印象的でした。谷口さんの写真については以前から知っていましたが、谷口さんがどういう人物であり、どこで被爆されたかなどは知りませんでした。谷口さんは 16 歳の時に兵器工場で働いているときに被爆されました。また、私が最も印象に残ったのは、谷口さんが被爆された場所が、爆心地から 1.8ｋｍも離れていたこと、またあの見るも痛々しい写真が撮られたのが、原爆投下から６か月もたってからのことだったということです。

このほかにも、爆心地付近では 70ｍの建物が 70ｃｍになってしまったことや、黒川さんという方が、爆心地から 500ｍというところにいながら、防空壕の奥にいたために生き延びたこと、爆風や衝撃波のため、遺骨が失われ、お墓に入ることすらできない人がたくさんいたことなど、様々なことを教えていただきました。そして何より、八木さんの「戦争を二度と起こしてはならない」という強い意志を感じました。

最後に八木さんは、「バトンを私たちに渡す」とおっしゃっていました。その思いを裏切らないよう、これからも平和について勉強していきたいと思います。

# 原田美智子さんのお話を伺って

HR205　A.M.

私が実際に戦争中の日本を生きた方からお話を伺うのはこれで３度目となりますが、今回のお話の中で特に心に残ったことばがあります。

それは「この苦しみや辛さを知ることで、幸せや平和を知ることができます。当たり前じゃない日常なのだと知ることができます」ということばです。私は今までずっと、どうしてこの方々は語り部になろうと思ったのだろうということが不思議でした。自らが経験した地獄のような出来事を思い出すだけでなく、それを経験していない人に語る、という行為は誰しもができることではないと思うのです。私がもし同じ立場だったら、きっとできないと思います。今だって実際振り返りたくない過去から目を背けている自分がいるし、語ることが簡単ではないこと、すごく不安で仕方ないこともわかります。

それでも原田さんたちは語ります。亡くなったご家族のこと、失ったもののこと、むごい姿の人々、火の海と化した町、恐怖にふるえた自分の姿…すべてを語ります。その理由が、前述のことばの中にあるのだと思います。原田さんたちはきっと、こういった地獄があったことを知ることで、今ある幸せを、平和を自覚し、守る決意をしてほしいという思いから、この活動をされているのだとわかったのです。もし私たちが戦争という過去を捨て去ったら、怖いから・つらいからと言って置き去りにしてしまったら、きっと歴史は繰り返すでしょう。また、同じ過ちを繰り返すのです。

今、私が生きていて、周りには自分を知り、自分が知っている人がいて、生活を営む場所がある。そのありがたみやそれがあたり前じゃないと感じられることが、恒久平和への第一歩だと、私は思います。一つ一つの幸せは小さなものだけれど、それが積もった山が「平和」というものになることを、原田さんは教えてくれたのだと私は思います。

## ◎セカンドハーベストジャパンを通した加工食品の寄付

**余った加工食品を食べ物に困っている人々にとどけるフードバンク「セカンドハーベストジャパン」の活動に協力すべく、１１月２８日から１２月１日にかけて１階エントランスホールにて、ご家庭で余った加工食品の提供を呼びかけました。その結果、２２ｋｇもの食品が寄付されました！**

**ご協力くださった皆さん、ありがとうございました。**